

摂食嚥下リハビリテーションの未来 —各専門職に何ができるか

Current status and prospects of each professional for dysphagia rehabilitation

摂食嚥下障害は多くの患者・高齢者にみられる症状であり、病院、施設、在宅、擁護教育の現場などあらゆる臨床場面で、摂食嚥下障害への対応が行われています。リハビリテーションに関連するどの専門職種の業務のなかでも、摂食嚥下障害に対応することが重要な部分を占めつつあります。そこで、日ごろは注目されることの少ない理学療法士、作業療法士も含めた、各専門職の方々に、その職種における摂食嚥下障害分野への取り組みについて、どのような特色を有し、力を発揮できるのか紹介いただきました。今までは、「摂食嚥下障害は自分とは関係ない」と考えていた方も、ぜひ自分の職域のなかで、摂食嚥下障害に対応していただけると幸いです。

理学療法士にできること 吉田 剛氏 729

理学療法士は、単に全身基礎体力の向上や肺炎に関連する呼吸理学療法だけではなく、嚥下運動障害に対して、詳細な知識をもち、嚥下筋と頸部・体幹機能の連環を把握して、嚥下筋機能向上、嚥下運動の改善にアプローチすることが可能である。また日本理学療法士学会は、3年前に栄養・嚥下理学療法部門を発足させ、テキストの発刊、研究会開催、研修会開催など積極的な活動を展開中である。

作業療法士にできること 植田友貴氏 735

作業療法士も摂食機能療法を算定できる職種であり、多くの場合、食事という動作場面にかかわることが多いが、その先にある摂食嚥下にかかわる知識は必須である。日本作業療法士協会で設けている専門作業療法士制度には、摂食嚥下専門作業療法士があり、2019年3月で10名が認定されている。今後多くの作業療法士が認定を目指すことが望まれる。

言語聴覚士にできること 長谷川賢一氏 741

日本言語聴覚士協会の会員が対象としている障害の第一位は摂食嚥下障害であり、発声発語器官と摂食嚥下器官の重なり、また認知障害も扱えることから、言語聴覚士が担う役割は大きい。認定医言語聴覚士制度も発足しており、摂食嚥下障害領域の認定者は352名である。今後は評価法に関する研究、訓練法に関する研究などが望まれ、VEへの参画と低栄養への配慮、呼吸リハビリテーションへの位置づけなどが課題である。

看護師にできること 浅田美江氏 747

1980年代後半から、看護師の卒前教育で摂食嚥下障害は含まれるようになり、また、努力義務化されている新人看護研修には、嚥下障害のある患者の食事介助が含まれている。一方、専門性の高い摂食嚥下障害看護認定看護師は、現在 827 名が登録され、全都道府県で活躍しているが、今後、その専従化にむけた仕組み作りが必要である。さらに、急性期の摂食嚥下機能の悪化予防、終末期ケアとしての「味わい」の提供など、すべての看護師に、嚥下障害のある患者を支えることが望まれる。

管理栄養士にできること 小城明子氏 753

管理栄養士は栄養状態を良好な状態に維持改善するだけでなく、食形態を調整するということで食事という「活動」を支援し、リハビリテーションの一翼を担う。また、栄養食事指導を通して、在宅生活や「参加」を支援する。国家試験への摂食嚥下の出題も増加し、1/3 の教育機関が嚥下障害の臨床実習を取り入れている。日本栄養士会は、日本摂食嚥下リハビリテーション学会と共同して摂食嚥下リハビリテーション栄養専門管理栄養士制度を発足させ、45 名が認定されている。

歯科の立場から 渡邊 裕氏 761

歯科はこれまでの歯の形態回復に関する「治療中心型」から、口腔機能を評価し維持改善する治療、管理、連携型に展開しつつある。歯科が中心となって推進するオーラルフレイル、口腔機能低下症、の両者への評価と対応は、摂食嚥下障害の発症並びに重症化の予防に貢献が期待される。さらに、認知症患者や終末期にある高齢者の摂食嚥下機能障害において大きな意味をもつ先行期についても、自立摂食能力評価や、食欲評価の評価スコアが開発され、研究が進みつつある。

書評	住民主体の楽しい「通いの場」づくりー「地域づくりによる介護予防」進め方ガイド (評者：門 祐輔).....	752
お知らせ	埼玉県立大学研究開発センターシンポジウム 2019.....	746
	第 6 回日本サルコペニア・フレイル学会大会	759
	第 9 回日本リハビリテーション栄養学会学術集会	767